

卿の一人を総帥に仰ぐべく三田尻へ向かう。そして、七卿の一人沢吉嘉を脱走させ、但馬に帰る途中、北垣は飾磨郡の新町で偶然同郷の進藤俊三郎（後年、原六郎）に会い、天誅組の敗報を知らされる。沢らの一行は、拳兵の中止・断行論が決裂したまま10月11日、生野延応寺に到着、翌12日の拳兵となる（北垣「但馬一挙の真相」他）。結果は、「半年貢取立之事」（年貢半減令）などを出して味方にしようとした農民に逆に包囲され、13日に潰走、15人の自刃、1人の射殺、2人の刑死という悲惨な末路であった。北垣は因州京都藩邸に逃げのびている。晩年で男爵になってからの発言であり、拳兵中止派であったことも考慮しなければならないが、北垣は当時の心境を「死ぬといふより外には何も考へない」と語っており、生野の乱は「戦争はしませなんだ、全くの瓦解であります」とデスペレートに総括している（同上）。

乱後の北垣は、「因藩機密周施方補助」（＝間者）になったと言われているが、この頃は八木龍蔵（又は良蔵）、日下部晋太郎、柴捨蔵などの変名を使って、京都・江戸間を往復したり（『安達清風日記』）、丹波の福知山藩に出現して同藩の改革派と連絡をとったり（『飯田節報公事歴』）、長州に寄寓して小倉口の戦闘に加わったりしている。だが、北垣が再び私たちの前にはっきり姿を現わすのは、1868（慶応4）年1月5日、西園寺公望を総督におわずか150名の薩長軍で京都を出発した山陰鎮撫の小隊長としてである。北垣は、丹波の馬路村で長州陣営馬路役所の名で河内山半吾を主任として、添役となって民政に当たっている（水口民次郎『丹波山国隊史』）。丹後の久美浜では、苛酷な軍事徴発から混乱が起きると、「此際柴捨蔵は銃手数人を率ひ頼に邑中を巡邏し、兵士を慰諭し、邑民に方向を示した」

いる。後年、北垣は「国道の過失あるや、先生其の座側に引きて、相對して静坐せしむること数時間、偶々其夜半を過ぐるをも忘るゝことあり、国道最初座戒の苦みに勝てず、然れども漸く黙坐精神を養ふの味を悟り、自己の日課と為すに至れり」（同上）と師を追想している。また北垣は、書物の「文字の区々たるに拘泥せ」ぬ豪胆さと、父が逝去すると「墓側に慮を結びて、通宵去らざることありき」といったナイーブさをあわせ持った多感な青少年期を、この池田草庵の下で過ごしている。

しかし時代は、この「慷慨悲憤の志氣」に満ちた青年を、学者の途に進ませるほど平穏ではなかった。1862（文久2）年——ロシア軍艦による対馬占領が行なわれた翌年——、北垣は「農兵を募って北海の防備」を考え、翌63年に上洛して山岡鉄太郎（鉄舟）、清川八郎らに会い、「山岡に頼んで老中板倉防州（勝美）」に農兵組織を建議している。当初の農兵組織の目的は、純粋に北海の防備にあったが、63年3月頃、長州藩士美玉三平らが参加してくると尊攘運動の一環へと性格が変わってくる。同年6月18日、北垣は美玉から下関の攘夷を聞いて長州へ旅立っている。この時のことを、後年、「国道文久癸亥の年、涙を飲んで嚴師に別れ、家を去て慈母に別れ、流離艱難」（『但馬聖人』）と記している。長州にしばらく滞在して、高杉晋作・林半七らと交渉をもったが、8月1日に再度上洛して、農兵組織のための三度目の建議を行っている。その成果もあって、8月13日に農兵組織の許可がおりる。8月18日政変の5日前である。

生野の乱は、長州藩士野村和作に、天誅組の乱を見殺してもよいのか、と言われた北垣らが中心になって、63年9月19日の会議で拳兵を決定する。北垣は8月18日政変で長州へ落ちた七

北垣国道という人物は、よく小説に登場する。船山馨の名作『お登勢』のなかでは、北海道開拓使のなかで稀有な公平無私の官吏として、田村喜子の『京都インクライン物語』（新潮社）では、京都の琵琶湖疏水事業を完成させた名知事として描かれている。今後も京都の建都（?遷都ではないのか）千五百年事業のなかで、北垣の琵琶湖疏水事業は称賛され続けるであろう。

しかし、明治時代の京都の民衆は、「こんどきた餓鬼極道〔北垣国道〕」と言って、北垣の琵琶湖疏水による重税政策を批判しており、日誌『塵海』に見る北垣の実像も、小説に登場してくるような民衆的で開明的な官吏とはほど遠いものがある。ここでは、『塵海』などを手懸かりとして、北垣の実像の一端を紹介したい。

#### 志士から官僚へ

北垣が歩んだ、豪農→尊王攘夷派の志士→地方官→政府高官という人生コースは、幕末・維新期を生き抜いた人間の一典型であり、彼らの営為こそが明治政府を底辺から支え続けたとも言える。今回は、体制の支柱となった人間の側から日本の〈近代〉の問題を考えてみたい。

北垣国道（幼名、晋太郎）は、1836（天保7）年8月27日、但馬国養父郡能座村の郷士北垣三郎左衛門の子として生まれた。北垣家は、代々庄屋の家系で、屋敷内に樹齢数百年に及ぶ樺の木があり、村人は称して樺の木さんと呼んでいた。晋太郎は「幼よりして伶俐なりしが、君天資文学を好み、経書歴史に心を潜め」（井輪屋「略伝」）ていたので、7歳より同郡宿南村の陽明学者池田禎蔵（草庵）の私塾立誠舎（後年の青谿書院）に入っている。塾生時代の彼は「容貌動止衆生に異り」、「才氣萬異にして識量あり。先生深く望を屬せらる」（『但馬聖人』）と語られて

#### 教室で語る学問

## 日本史雑記帖③

## 今西一



## 志士から官僚へ

北垣国道小伝

(稲葉市郎右衛門『過渡の久美浜』)と言われている。この西園寺軍もまた、一度は馬路村において、二度目は久美浜において「年貢半減」令を農民に出している。勿論、鎮撫終了後に取り消されている(『兵庫県史』5)。

その後、70(明治3)年に弾正台から徳島藩の内紛(所謂「稲田騒動」。これについても船山の『お登勢』が詳しい)で淡路に調停に行っている。この時、岩鼻県権知事小室信夫等も行っているから、二人はどこかで会っているはずであり、小室信夫の養子が後に民権家として北垣に対立する小室信介である。弾正台の廃止後は、一時鳥取県の少参事となるが、71年に北海道拓使7等出仕となつて、74年に5等出仕を辞任するまでの3年間、札幌、浦河・樺太支庁に勤めている。74年の辞任の原因は黒田清隆との衝突が十分に考えられ、しばらく浪人して77年からは熊本県大書記官に任ぜられている。熊本時代は正に西南戦争の渦中に入るが、ここでも県令富岡敬明と対立したとみえて、僅か1年3ヵ月で内務省少書記官に転じている。1年後に高知県令、81年1月19日からは京都府知事である。波乱に富んだ前半生であり、官吏になってからも「難治県」ばかりを歩いている。晩年は枢密院顧問、82歳で没している。

### 『塵海』より

北垣は、3代目の京都府知事である。1868年から75年迄勤めた初代知事は長谷信篤という人物で、京都出身の公家であった。当時の「京都御政府」には権知事岩下方平(鹿兒島藩士)、大参事松田道之(鳥取藩士)、権大参事横村正直(山口藩士)、少参事藤村信郷(熊本藩士)など錚々たるメンバーがいた。彼らは各藩の俊英であり、それぞれの思惑を秘めて京都での主導

権争いを行っていたので、長谷は名門と温厚な人柄によって知事に担がれていたとも言える。

これに対して2代目知事の横村正直は強烈な個性の持ち主である。横村は長州藩の密用間次(横目)の出身であり、維新後、急速に京都府政の中枢に登った。その勤業政策などには注目すべきものもあるが、「小野組転籍事件」——京都の豪商小野一族の東京移籍を認めない——などという暴挙もあえて行う独断と偏見に満ちた人物である。80年、地方税追徴事件によって府会と対立し、81年1月辞表を提出している。その後任として来たのが北垣であり、京都は難治県中の難治県であった。

ここでは、紙数の制約もあるので、北垣を苦しめた東西本願寺の紛争や、有名な琵琶湖疏水事業などの話をやめて、北垣の日誌『塵海』から彼の民権運動観を中心に紹介しておきたい。

横村を辞任に追いこんだ地方税追徴事件が、自由民権運動の府会闘争であったこともあり、北垣は就任の時から京都・大阪などの民権運動に深い関心をもっていた。北垣は、「明治14年政変」の前後には、1881年10月7日付で開拓使の官有物払下げを「却下」するように建言し、また10月14日、集会条例の廃止建言を三条実美に送っている。特に後者については、「集会条例の廃止を太政大臣に建議したのも府知事、県令中には例をみない」(『京都の歴史8』)という高い評価があるが、建議の内容はあくまで議院・新聞紙条例・集会条例の三法は「社会ノ公安ヲ維持スルノ良方」であると認めたくえて、集会条例は「警察ノ運用」に問題がある、としたものである。とても「『地方分権』『住民自治』を顔面どおり、素直に育てることを目標として民治を行なっている」(同上)、と彼の姿勢を評価できない。

1882年の松方正義大蔵卿との会談では、政党は政府が強固であれば「自消自滅ノ勢トナル可シ、其忍耐ハ四五年ヲ保ツ能ハサルヘシ」(7月18日)と語っている。また、土居通予から大阪の立憲政党の動向を聞き——

卓劣軽薄極り無シ、到底成り立ツヘキ見込ナシ。故ニ古沢(滋)ハ之レヲ脱シタリ。中島(信行)ハ只困却ヲ極ム。社内中島ヲ軽侮シ、古沢ノ浮薄ヲ罵ル事甚シ。…(略)…草間(時福)・河津(祐之)ハ無氣力・無(度)胸等ノ学者流ナリ。田口(謙吉)ハ無学ニシテ卑劣家ナリ。中島ハ只仏ヲ信スルノミ。古沢ハオニ過キテ胆氣無ク、浮薄ヲ極ムル者ナリ。小室信介ナル者独り胆アリ略アリ。沢部(辺)正直(修)一片ノ書生ナリ。(1882年12月2日)

と記している。ここには民権運動に対する嫌悪感が滲み出ているが、北垣に報告している土居も立憲政党の社員で、今日流に言えばスパイ行為であり、諜報活動は幕末以来の北垣の御家芸である。また同年3月25日には、大阪で建野郷三知事に会い——

建野氏大東日報発兌ノ義ニ付相談アリ。羽田恭助・西川甫来ル。羽田恭助、山田(顕義)内務卿ノ書状ヲ以テ大東日報発兌ノ主意ヲ述ヘ賛成ヲ乞フ。内務卿書状中亦其事ヲ示サル。と記している。「大東日報」とは政府寄りの保守系の新聞であり、言論操作のためにも活動していることがわかる。

北垣は、「明治14年政変」以後、伊藤博文への傾斜を強めており、保守派の土方久元にさえ、1881年12月の内務省召集の地方官会議では——

北垣京都府知事ナドハ、最モ自由風ノ人ニシテ、河野(敏謙)ニ親敷アリシガ、此度(14年政変後)ハ余程後悔セルガ、色ヲ変ジタルノ風評アリ。(『保古比呂比』10)

と皮肉られている。1886年1月に上京した時、伊藤博文と会見した感想を語って——

一地方ノ人民ヲ預リ関スル者ハ、総理大臣ノ心意ヲ体シ上下調和ニ力ヲ尽シ、一人モ政府ニ背反スル者ナキニ致スヲ目的トスヘキ……。(1月10)。このあたりに北垣の地方官としての本音がある。

北垣のこうした民権運動・民衆観は、どこで形成されたのであろうか。私は、それは北垣の志士としての活動に淵源があると考えている。生野の乱では、自らが組織した農兵隊の農民たちに包囲されて同志が殺された体験、西園寺の山陰鎮撫での「年貢半減」令による民衆操作の体験などが、狡猾な民衆観を育成していたのである。さすが作家の船山は、北垣が「権力の側に坐っている人間にちがいないのである」とおとしめられ、しいたげられて、日陰の地べたを這いずりまわるようにして生きている者たちへの理解や共感にも、おのずから限界があると、作中のお登勢に語らせている(『続お登勢』)。私は、志士の「維新の精神」を不当に美化(村上一郎)し、「草莽が地方的な世直し勢力と結びつく方向」(高木俊輔)などを過大評価する研究に疑問である。志士＝草莽たちは、民衆のなかでは常に権力者として登場したのである。彼らが明治の地方官となり、明治政府と対立した事例があったとしても、それはあくまで彼らの「仁政イデオロギー」の枠内である(山中永之佑「明治初期官僚制の形成と堺県知事小河一敏」)。

### 〈参考文献〉

- 『塵海』(京都府立総合資料館所蔵)
- 北垣園道「但馬一揆の真相」1912年
- 井輪屋良二郎「京都府知事北垣園道君略伝」1881年
- 豊田小八郎「但馬聖人」1907年(青谿書院復刻版)
- 船山馨「お登勢」(正・続)1969・73年
- 後藤恭生「北垣園道年譜余談」(『京都市史編さん通信』47号、1973年)